巻頭言

公共事業の品質確保と入札契約制度

日本列島のほぼ中央に位置する京都府は、264.6万人の人口と4,612㎢の面積を有しています。人口は全国で13番目、面積は国土の1.2%で、47都道府県中31番目の大きさです。ここ京都の地は、北から南まで、豊かな自然・環境との調和の精神と、世界に誇る文化が花開き独創的な人材や優れたものづくりの企業を生み出してきた歴史・風土を持っています。また、京都は古くから交流の舞台でもあり、国内外との交流により多くの人々が集い、さまざまな新しいものや考え方を受け入れることにより、常に時代を先取りしてきた地域でもあります。

さて、わが国の経済社会動向は、指標的には息の長い景気回復が続いていると言われていますが、地域・中小企業における景気回復の遅れや雇用形態の激変など構造的な問題を抱え、原油価格急騰やサブプライム問題などの外的不安要因もあり、依然として先が見えない状況にあります。京都府におきましても、府内の南北格差、地域文化の衰退などさまざまな問題が顕在化しています。

こうしたなか、府民一人ひとりが安心して日々の生活を送れるよう、医師確保対策や子育て支援、安定的な雇用実現などに取り組むとともに、京都縦貫自動車道、鳥取豊岡宮津自動車道等の交流ネットワークの形成や地域道路の整備、河川改修や防災対策などの社会基盤整備についても全力を挙げて取り組んでいます。さらに、府民の力が最大限に生かされるよう、昨年から、地域の身近な問題への自主的な取り組みを支援する「地域力再生プロジェクト」を積極的に展開しており、本年は地域力再生のセカンドステージとして、私どもも積極的に現地・現場に出向き、府民とのネットワークを創り上げるなかで、府民が主役の新たな行政を確立し、京都の新しい魅力や価値の創造に取り組んでいきたいと思っています。

表題の公共事業の品質確保と入札契約制度改善の取り組みにつきましては、平成19年３月に策定しました京都府公共調達の改善の骨子に基づき、平成19年度から、電子入札を全発注案件について実施するとともに、1,000万円以上の全ての工事を対象に一般競争入札を実施することにしました。また、指名競争入札をする場合でも、従来10者指名であったものを20者とするように改めました。さらに、手続きの透明性をより高める体制とするため、指名委員会や入札監視委員会などの入札事務を事業担当部局から切り離すとともに、入札課を新設しました。これらにより、47都道府県のなかでも最も透明性、競争性が進んでいるグループになったのではないかと思っています。一方で、確かに透明性、競争性の確保は重要なことではあ

京都府知事　山田啓二（やまだ けいじ）

りますが、競争激化による過度なダンピングで粗雑工事が増大するようなことや工事中の安全が損なわれるようなことになれば、府民の安心・安全が脅かされてしまいます。こうしたことから、きちんと施工できる業者に良い仕事をしていただくという視点を持つことも重要だと考えています。

そこで、総合評価の拡充にも取り組んでいます。本府の総合評価方式として、加算点評価項目に建設機械の自社保有、雇用の維持などの「府民の安心安全」、「地域力向上」の「必須項目」と、安全管理、品質管理などの「各工事特性に応じた評価項目」の「選択項目」とを組み合わせる方式を構築し、昨年度、20件の工事で試行しました。今後とも質の高い施工により良好な社会基盤を府民の皆様に提供できるよう引き続き拡充に努めていきたいと考えています。また、簡易な方式でありますので、府内の市町村からの照会もあり、積極的な支援を行っているところです。

ダンピング対策としては、５億円以上は低入札価格調査制度を、５億円未満工事については最低制限価格制度を適用しているところであります。しかし、工事受注を先行し、会社維持のみを優先して最低制限価格ぎりぎりの価格で応札している案件も見受けられます。それでも品質の良いものを、安全に施工できるならば良いのですが、そうでないのならば問題は非常に大きいと思っています。我々としては、きちんと自社で機械やオペレーターを持つ会社、社員を抱えて地域の雇用に貢献している会社、工事成績の優秀な会社などに工事を任せることが結局は府民利益に沿うものであり、そういう優良な企業が工事受注できるような制度や仕組みにしていきたいと考えています。このことが、府民の安心・安全にも繋がるものと確信しています。

おわりに、京都では、６月26、27日の両日、京都迎賓館等を舞台に「Ｇ８サミット外相会合」が開催されます。ポスト京都議定書に向けた地球環境問題などの重要テーマが話し合われ、北海道の首脳会合とあいまって、京都の地から全世界へメッセージが発信されていくことになります。また、今年は、世界に誇る古典文学の華ともいえる「源氏物語」の千年紀（ミレニアム）にあたります。今ひとたび、日本文化の原点であるこの汲めども尽きない素晴らしい古典の水脈から、現代の日本が失いかけている大切なものを汲み上げる機会にしたいとこの一年、産学公を挙げさまざまな取り組みが展開されます。多くのみなさまのお越しをお待ちしています。